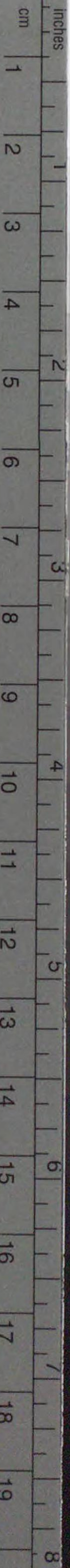


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



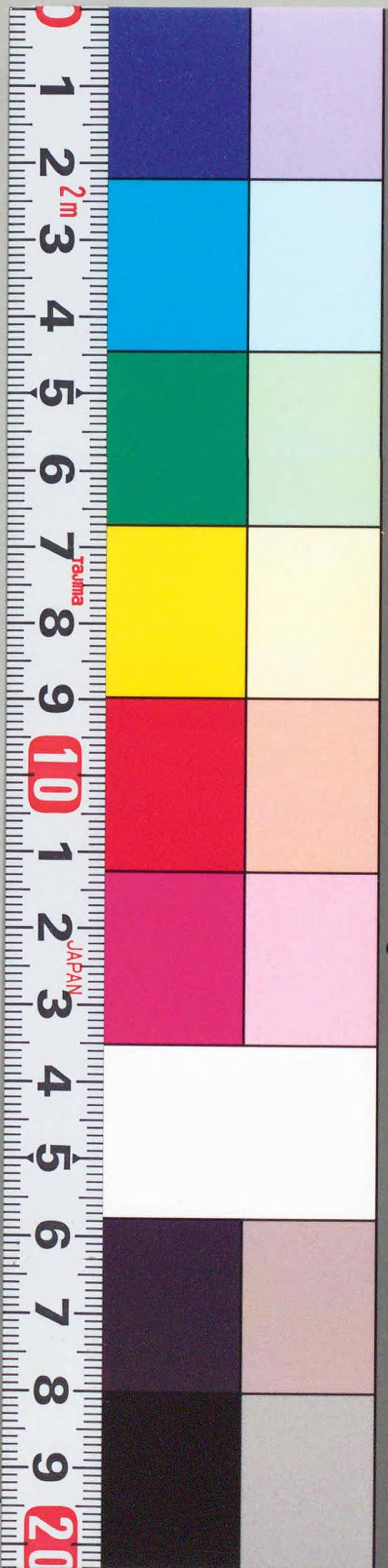
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



911.168
Ka584n

911.168
Ka584n



00319105

事故本
乱
~112P
193P~208P
129P~237P
113P~128P
193P~208P重複
55.9.24

1883

1883

歌集

野に住みて

片山廣子

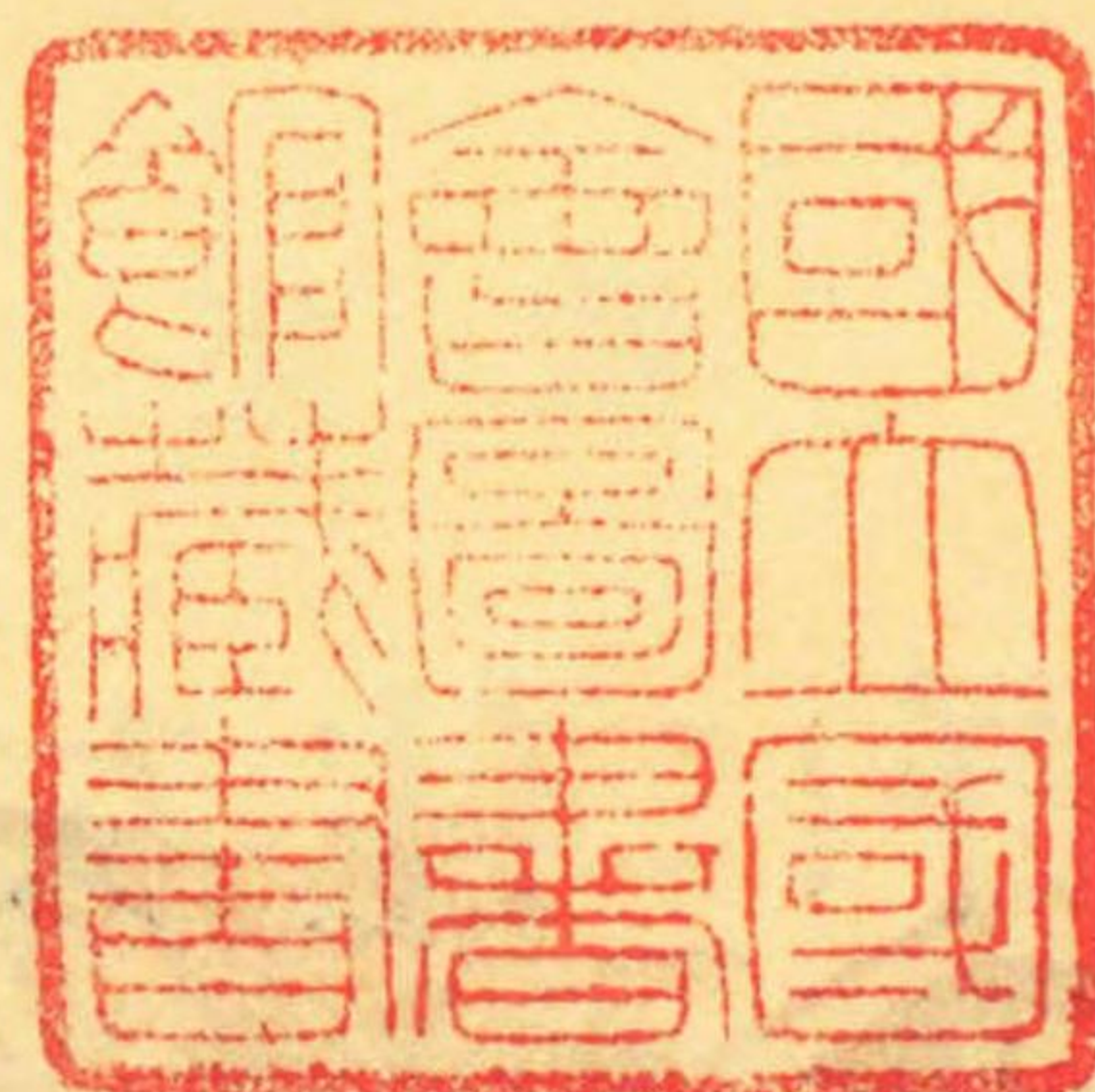


株式會社
第二書房

911.168 Ka 584 n



濱田山の家 栗原享撮影



. 319105

目次

| | |
|------|----|
| 東北にて | 13 |
| 秋夜 | 17 |
| 中尊寺 | 19 |
| 仙臺にて | 22 |
| 石の巻 | 23 |

| | |
|--------|-----|
| 三崎にて | 80 |
| 桃畑 | 81 |
| 砂漠 | 85 |
| 煙草 | 87 |
| すぎし日 | 89 |
| 街の湯 | 90 |
| 希望 | 93 |
| とほき追想 | 96 |
| ふるき家 | 99 |
| おもひいづる | 101 |
| 砧 | 104 |
| 萩窪にて | 105 |

| | |
|-----|-----|
| 春夜 | 107 |
| いちご | 108 |

野に住みて

| | |
|-------|-----|
| 野に住みて | 111 |
| 使 | 115 |
| 虚無 | 116 |
| かへり來て | 119 |
| 遠富士 | 123 |
| 浮浪人 | 124 |
| 越路 | 127 |
| 生くること | 129 |

| | |
|----------|-----|
| 六里ヶ原にあそぶ | 163 |
| 碓氷 | 169 |
| しろき蛾 | 171 |
| 雨 | 174 |
| 山すその町 | 177 |
| 七月 | 178 |
| 苔庭 | 180 |
| 初冬 | 181 |
| 秋も冬も | |
| りんご | 187 |
| すぎゆく日日 | 190 |

| | |
|---------|-----|
| わかき友 | 131 |
| 野はらの家 | 132 |
| 遙けきもの | 134 |
| 春日 | 135 |
| 夏ふかく | 138 |
| 騒音 | 140 |
| ひばりの歌 | 144 |
| 夢 | 149 |
| いたち | 153 |
| 軽井澤にありて | |
| 日中 | 157 |

野に住みて

片山廣子

| | |
|---------|-----|
| 饗宴 | 194 |
| 春の色 | 199 |
| をんどり | 203 |
| 白桃 | 208 |
| おもひでの駿河 | 210 |
| 蠟の火 | 213 |
| 秋も冬も | 217 |
| むらさき | 221 |
| 天使 | 224 |
| 暗殺者 | 229 |
| 祈願 | 234 |

東北にて

昭和十六年—十八年

東北にて

東北に子の住む家を見にくれば白き仔猫が鈴
ふりぬたり

胡桃の樹さはに實をもつ坂みちのふるき石段
おりてゆくなり

わがむすめの庭の樹すべてわか木にて廣瀬川
のみづ町をゆく見ゆ

大野はら千歳の驛にわが待てば林檎をのせて
青森の汽車

三十分汽車まつとわが歩きつつ千歳の町に大
き梨を買ふ

かぜに日に樹樹さらされて色深む神無月なり
陸奥^{むつ}の山ゆく

たまきはる生命たのしみちのくの鳴子^{なるこ}の山
の紅葉みむとす

安倍の子ら荒きうからが戦ひしこの山國のま
あかき紅葉

いやはてのいのち燃えつつもえ散らむ出羽いでの
山の今日のみぢ葉

平らかに小川流れてもみぢ濃き瀬見の湯の山
たそがるるなり

繪のやうなりと一言にいひし松島の青波こひ
しかの島島も

秋夜

鹽釜の町をあるきて

満もち月の夕べうす霧まける港町は魚のにほひす
路にも橋にも

鹽釜のみやしる高くのぼりしに海のいさり火
きらめき初めぬ

りんご賣り梨うる夜店は電氣あかり明るしうしろに
泊るからつぼの船

中尊寺

ほのかに光りたたずみいます御佛よみちのく
の山に老いたまひける

そのかみの日本にほんの長者藤原氏のみたまら休む
山に來にけり

經藏の金泥の經はいまの吾にかかはりもなく
古りにけるもの

大杉もうごく日光ひかりも閑寂しづかなる山寺の路にわれ
はよそびと

山栗のおち散らばりし坂路より田の面をみれ
ば田に人もなく

山に添ふ白き川原を水ながれ何のことなくひ
かりて流るる

東北の山寺のなかにわが觸れし虚無の感じを
秋かぜに吹かす

仙臺にて

丘のうへはしだり櫻の花咲きみち東北の都市
日もきよらなる

ましろ花こぶしの花が空をおほひ香煙ながる
政岡の寺

石の巻

入海の浅瀬の水草日にねむる手樽の驛をわが
過ぎにける

をばり悲しく田道將軍が眠りいます蛇田よけ
ふは秋の日のなか

みちのくの海邊の家にみだれ咲く黄菊しら菊
食すためにありとも

まひるまの空氣騒がして鷗とぶ船つくり場の
黒き屋根のへ

晝食せむ家たづねつつ鷗飛ぶ裏町をゆき橋わ
たり行き

水に立つ石垣ふるく黒ずみて秋日のなかに白
きかもめら

海かぜも日もまともなる丘の上に大洋にむく
神のみやしる

石の巻日和山のうへにわが見たる海とそらと
の異なる日光

青海の波に一すぢかけりあり北上川の水流れ
入る

大洋は秋日まぶしくいにしへの伊^い峙^しの水^み門^{かど}を
船出づるけふも

日^ひ和^や山^まの南にむける傾斜面けふも菊さき海か
ぜ吹くや

日だまりに櫻葉ちりし家むらよまた見む日な
く遙かなるかも

ふるき家

昭和十八年—十九年

秋

夏深む 蔬菜の畑守りつつ
みのりしものら枯る
るを見たり

芝を刈り草かり清むるわが庭に
蜥蜴のともら
影ものこさぬ

われよりもしづかに暮らす人ありて季節變れば
文たまはりぬ

秋づきてさびしき生活くらし狐など訪ひくる支那の
物がたりめく

機おりの聲にきき入り秋の夜の小さきものに
親しみおぼゆる

湖 魚

湖魚すこし送ると書きし文ありてけふを楽し
くわが待ちしもの

波くぐりさばしるものの姿すがたして身の透きと
ほり光る乾魚ほしうを

富士墮つる裾野の湖のみづ深くいのちを保ち
し魚身らひかる

いをくづの泳ぎいきづく世界などわれの知ら
ざる世とは思はず

魚見つつみづうみ思ひ水おもひまぼろしは飛
ぶ秋の山原

霧うごくしろき湖邊の—ところわがために灯
をともしたまへる

海鳥

けむり吐く煙突多き大崎のそら舞ひおりし眞
白きかもめ

冬がれの街路樹のかげに立ちとまりめざまし
く見る一羽の鷗

三共の工場くらく目を背おひ前なる川にしろ
き鷗とぶ

堀割の油うく水とすれすれに飛ぶ鳥のつばさ
眞白なるかな

母の墓訪はむと來つる大崎に海こそ見えねし
ろき海鳥

海かぜの流れのままに鷗らは煙突多き青ぞら
もとぶ

栗

物ともしき秋ともいはじみちのくの鳴子なるこの山
の栗たまひけり

晴れくもる秋日のなかに育ちけむ手にのせて
みる遠き山の栗

來む春も生きてあらむと頼みつつわれ小松菜
と燕のたねまく

芝庭に目ごと來りて蟲ひろふ嘴あかき鳥に聲
かけてみる

栗鼠あそぶ林のなかの家のこと子は言ひいで
て行けよとすすむ

はうれんさう

あをあをと はうれんさうの葉がみえてけさ降
りし雪は優しくわか

こもりゐも外氣の霜にかこまれて足のをゆび
の霜やけいたむ

微笑

生きてをる吾みづからをいたはりぬ世を隔て
たる友らは遠し

いくたびか老いゆくわれをゆめみつれ今日の
現^ま在は夢よりもよし

夢おほく無知なりし日も悲しみに屈してあり
し日も過ぎてゆき

年とりぼけてもう駄目と生きてゐるひとりの
人をかれら葬る

闘争は大河のごとく地を捲きて古りたるもの
ぞ押しながさるる

わが前に白くかがやく微笑なり月日流れて友
をおもふとき

待
つ

待つといふ一つのことを教へられわれ髪しろ
き老に入るなり

あまぎかるアイルランドの詩人らをはらから
と思ひしわが夢は消えぬ

世をさかる寡婦ひとのわれにうらやすく人の洩らしし嘆きもあはれ

脚折れし玩具の鹿を箱によせかけ痛むこころに立たせて見つつ

動物は孤食すと聞けり年ながくひとり住みつつ一人ものを食へり

まどふ吾に一つの示教をしへたまひける或る日の友よ香たてまつる

地獄といふ苦しみあへぐところなどこの世にあるを疑はぬなり

六義園

もみぢ葉も残らぬ庭をゆきゆきて遠世のひと
の聲を聞きたり

六義園の笹山のぼり悲しくなりぬ大きなる古
き庭は明るく

うねり曲がる笹山の徑おり行けり大池の島に
鴨ら日を浴ぶ

早春

火を吹けばわが息に炭火おこるなりそとは風
まじり雨荒き夜

生れづき二月もちかし町かどの花屋に白きし
くらめんを見る

夢にひとり池のまはりを歩く氣もち肌さむし
けふ友らとわかれて

影

死をつれて歩くごとしと友いへりその影をわ
れもまぢかに感ず

うつそみはみな老ゆるなりわが友よしづかに
老いむと人に言ひつつ

ひと歸りわれ一人なる部屋のなか寒くおもひ
て火をまもるなり

息しづかに夜ふけの部屋に祈ることはわれみ
づからにいふ言葉なる

野牛

野牛のごとく心のうごき重ければひと行く道
にわがゆかざりし

友もたずもの言ふこともすくなければおのれ自己に
こもり老いゆくならむ

子とわれとすでに幾つもの波を越えあるとき
は世に馴れし思ひする

ともにあればいつも若しと思ひるたるわが子
もやがて年ふけむとす

移したればさかじと思ひし山茶花の紅きつぼ
み見ゆすでに霜月

浅間山

あらかかぜ木むらのしげみ吹きみだし椿の花
が目にたちて揺れる

女ひとり老いゆく家はものよどみきたなき心
地す雨か雪か降れ

一人なる夜の卓子にわが指と銀器がくろき影
をもちたり

はつきりと夜なかに覺めておもひるたり浅間
山はこよひ黒くねむるや

赤いあかりほのかに壁に映りをり耳なりすれ
ば目をさましゐる

死ぬことを恐ろしきやうに思ひはじめ一二歩
われは死に近づける

柳

四月一日、鎌倉にて

うらわかく柳のいと青む日にむすめとまゐ
る白旗の宮

九品佛にて

うすぐもる春^{はる}日の寺に鳥鳴けりさかりの梅が
黄ろくみゆる

からうじて清らかにありし寺庭もやや荒れむ
とすみいくさの春

人なくほのぼのとして異國の寺めきぬうす眠
るごとく太陽がある

わがうごきを鳩らの身に感ずるならむ一せいに
飛びわれ驚かさる

金いろの佛の御膝ほのかなる暗き御堂に鳩の
羽音す

むさし野の西の丘べに昔より佛いまししを今
日ながみたる

武藏野のこの僻村ひらさとにみほとけを請じまつりし
日を憶ひみつ

御佛とわれとの距離のとほきかな呼びまら
する心寂しく

大寺のうしろを行けば田舎みちなり松かぜの
中に墓石いし彫る人あり

母

むさし野の大きな家にうまれ出でて母はと
もしく老いたまひたり

はなれ住みて母もむすめも老いぬれば記憶う
すらぎぬ共にありし日の

母のゐるましろき壺を土深く納めて心やすら
かになりぬ

うつそみに思ひしことの數かずもかくて消え
ゆく母よわすれたまへ

かすならぬわが生命さへ母のために一つの樹
かげつくりしと思はむ

よき言葉

友のいひしよき言葉われと共にあり雨つゆの
ごとく心うるほす

わがさもしき生活くらしの中にけふは花を挿す宴会
のカーネーション

わが祖父が長者なりしをおもひ出でぬ映畫よ
り夢よりなほ不思議なる

くたびれて地下鐵おりし夜ふけなり全身うつ
る歩廊の鏡

恐れつつ

惜しみなく時よ流れてながし去れ陰影かげ深かり
しわが生命なる

みちのくの遙かなる町に住む子より文來たり
けり猫が子を産みしと

子のために重荷とならむを恐れつつも老いゆ
く吾の心よりかかる

白鷺

相模の國府の跡をたづね行かば寂しからむと
見あぐるもみぢ葉

大ぞらに火を噴く山を見なれては蒼ぐらきか
な相模のやまやま

母が好む寂しきものの息吹きする大山を見よ
と吾子いひしなり

さがみ川中洲の砂に白鷺が一羽立ちつつ秋日
にしろし

さざ波のかがやき光る川なかに白鷺が立ち風
に吹かるる

山路より蓆を多くつみて來し車に逢ひぬ厚木
のはづれ

山山に山窩ら住みし世はすぎたれ厚木はけふ
も山のにはひす

大森海岸

茶屋の庭は石と松ばかりなり海すぐそこに動
きくもり日

外人墓地

昭和十三年、横濱にて

大ぞらと市街まちに向へる傾斜面十字架のまへに
咲ける花

鐵橋

水涸れし川原はるかに目をうけて鐵橋がたか
く野をつなぎゐる

川原の石みな温かくぬくもりて空に片よるま
あかき冬日

わかくて見し川はみづ流れ野に青さあり小舟
人をはこびゆきし

76

野をおほひ家家つらなり人住めり限りなく人
は殖えゆくならむ

きつねや犬と野に住みし祖先らも寂しくなり
川などながめけむ

沼袋百観音

日のひかり身にしみて清し武藏野の家まばら
なる野の空気がなり

十二月ひる暖かく観音の庭いちめん霜けむ
りつつ

77

あたたかき日向の庭に百観音庭木のごとく立
ちいますなり

ひとびとのよろこび心につくりたる観音の姿
みなすこし違ふ

築山にひとりの観音いましけり花捧げられ香
うすく烟り

思ひまどふ一つの事に引かれつつ吾まゐるな
り百観世音

三崎にて

秋の日の三崎のみなと海に向く家家の窓みな
ひらきたり

さかな樽無數にならぶ町うらに氷をひけり若
ものがひとり

桃畑

久しくゆかざりし極樂寺に行きて

極樂寺秋日みちたる谷ゆけばわが親たちが住
むかと思ふ

やがてわれら住まむと思ひし谷あひはさやけ
き秋の日和なるかな

かりそめにわがおとなへば谷の家のおく深き
土間に人はありけり

日あたりによめな咲きたる岩山のいづれの隈
か雀とびたる

樹樹うもれ風たち騒ぐすすき山けものの通る
路を見にけり

秋の日のわが山畑の芒山すすきの中に稻荷あ
るなり

谷かこむ山の樹すがしわれやがてここに住ま
むと人は言ひしも

柿あかし海かぜの來るこの谷にわがうつそみ
を老いゆかしめば

いちめん雑草ひかり桃畑の桃の木いまはす
がれたるかも

砂 漠

舊約聖書、出埃及記をよみ、モーセをおもふ

四十年砂漠のなかに住みけりと読みしは古き
よそぐにのこ

山にのぼり約束の國のぞみ見て息たえけると
記には書けり

おもひ凝り曠野の石に彫みける十の誠も人忘
れたり

ぬすむなかれと誠は言へりひもじさに砂漠の
民ら盗みしならむ

煙草

友田恭助氏を

わがいのち劇に捧ぐといひし人もたたかひな
れば支那に死にたり

一ぼんの煙草を人とわかち吸ひいのち死ぬる
をきみは知りけむ

ク
リ
ー
ク
の
に
ご
り
た
る
水
に
隠
れ
け
む
か
の
美
し
く
し
づ
か
な
る
か
ほ

「一つの生命われ死なむにつぼんのため」女
田ほほゑみ言ふ心地する

狭き門くるしき道をあゆみたる道のいやはて
に死は輝けり

すぎし日

志賀すゑ子夫人を

白菊のほひみつる部屋に君いましぬ額づき
て聞くすぎし日の聲を

街の湯

たそがるる街湯まちゆの窓のあかり明し人ひとごゑこも
り湯を浴ゆびる音

湯氣ゆけこもる大き湯ゆぶねに浸ひりゐて無心むしんに人の
裸體はだかをみつ

われもまた湯氣ゆけにかこまれ身を洗せんふ裸體はだかむら
がる街湯まちゆのすみ

春の夜の雨あめもきこえしわが家のひとりひとりの湯ゆぶ
ね戀こひふるともなく

湯ゆげむりにうごめき光ひかりるわれらわれらはも裸體はだかを日ひ
常ねの姿すがたのごとく

いにしへの病者を洗ひたまひけむ
大き湯殿を
ふと思ひたる

希 望

いつよりか激しき心しづまりて
いまは老いゆく
花ある家に

感ずることこの頃すこしに
ぶりたるわれはま
ことに老いそめしなり

火のごとく燃え盡きることありと聞きわかき
吾はそれを悲しく思ひし

祈ること何ものこらぬ年になり枯木のごとく
人死ぬるなり

あたたかに厨のものにほひ立つ日の暮れが
たは子の家をおもふ

あらたまの硬きところは親より受けふつつか
にわが子も世を生きるならむ

希望^{のぞみ}もつは希望^{のぞみ}失ふことなりと吾にいひける
その友も死に

とほき追想

おもひ出は今かそかなりこともなくしづかに
生きて死にたまひける

世ばなれて老いゆく父をあはれみし若きむす
めよ吾にやあらぬ

香水を手巾てふきに撒きてわが父が海彼に住みし一
千八百八十年

おともなく遠くその世はさかれどもわが現身
に父いますなり

生きよどむ今日のこころに思ひやり父を呼ぶ
かな時さかりつつ

やみの夜の庭に散歩のたばこの火憶ひいだし
ぬわがわかき父よ

人に打たれひとを打ちえぬ性もちて父がうか
らは滅びむとする

ふるき家

子がうゑし芽生の楓そだちけりしみじみ愉し
古き家に住み

かがみのやうに古き板戸を光らせむと雨ふる
朝もみがきつつたのし

髪のいろやや變りゆく母ながら汝が母をあま
り心にかくるな

女らの静かにくらすまひる間を黒きのら猫が
縁にあがりくる

くれはやき山手の坂を下りくれば花屋のあか
りに菊の花しろく

おもひいづる

伊吹嶺に灰いろの雲かかりゐて心をぐらく旅
ゆきしなり

訪ねゆける加納の家は菊咲きて唐傘のほね日
に乾されるし

傘のほね秋の空氣に開かれて明るき前庭にのい
くつもの圓

102

男らのいで入る土間のおくに立ち傘屋の妻は
ほそく美しく

白菊のちひさき花の咲きかこむ庭のはなれに
人住みてゐし

雨かぜは激しくとも晴るる時あらむ生きてお
はせよとわが言ひにけり

美濃の國稻葉の郡ぐんのはちす田の中なる寺にわ
がすわりし緋毛甕

103

砧

昭和十四年五月、富岡冬野氏を砧に訪ふ

草の名をよく知る友と路ゆけり武藏野のはし
の青き砧まち

萩窪にて

なき與謝野晶子夫人のみまへに

夏山の中なる家にいませどもすでに歴史に入
りたまひける

大なるもの終る日のさびしさは君みづからも
知りたまひけむ

むさし野の雑草青きひとつ家に歌會せしはわ
かきひとびと

筆ほそく晶子と書ける御文をただ一つわが持
ちてゐたりし

につぼんの三代^{みよ}を貫ぬく歌の橋かけたる人も
今は神なる

春
夜

鏡にうつしながむる窓^{そと}外の椿の花しぼり花咲
き春はいま盛り

いちご

ながく住みたる大森を離れて井の頭線なる濱
田山に移らむとす

かぜ立ちてまだ春わかきわが庭もいちごは白
き花もちてゐる

つる伸びていちごは花をもちそめぬ蓬に交る
赤きそのつる

野に住みて

昭和十九年——二十二年

野に住みて

昭和十九年六月、濱田山にうつる

人げ遠き野の風物に交りゐて
生きのこらばと
われは恐るる

夜かぜ吹く野のわが家にかへり
くれば星ぞら
更けてものいふ星

北方より爆音來たる星ぞらの星濡れひかり夜
露ふりつつ

112

わが母も老いたまひぬと子がいひし嘆きの言
葉ひとつてに聞き

われを守り吾に仕ふるわかき子をむすめと頼
み野の家にくらす

過ぎし日の熊の平をおもひいづ官舎の庭のダ
リアの花も

193

饗宴

麥の芽のいまだをさなき畑に向く八百屋の店
は一ぱいの林檎

深山路のもみぢ葉よりも色ふかく店の林檎ら
くれなるめざまし

立ちて見つつ愉しむ心反射して一つ一つの林
檎のほほゑみ

みちのくの遠くの畑にみのりたる木の實のに
ほひ吾を包みぬ

手にとればうす黄のりんご香りたつ熟れみの
りたる果物の息

すばらしき好運われに來し如し大きデリツシ
ヤスを二つ買ひたり

あま酸ゆき香りながれてくだものと共にわが
ゐる秋の夜の部屋

宵淺くあかり明るき卓の上に皿のりんごはい
きいきとある

日のくれて靜かなる家にりんご割る音がさく
つと簡單にひびく

わがいのる人に言はれぬ祈りなどしみじみ交
る林檎のほひ

人多く住みける家をおもひいづ林檎をもりし
幾つもの皿

饗宴あかりのをはりしあとの静かさに時計を聴きぬ
電気あかりさやけく

春の色

みちのくに旅ゆきし日のおひでは島島うかび
青ひかる波

本によみてわが親しみしみちのくなり野に人
あらず山山もみぢす

柿の實か柿のくち葉かよく見えぬしげみの小路
路すぎて訪ふ

夕ぞらいちめに赤く霜ふくむ空氣のなかの
野はくれてゆく

月がしろく霜も眞白き庭に向くがらす戸の家
に今ははや寝む

けふよりぞ大寒といふに空青し風をききつつ
熱き茶をのむ

ひとりゐてトーストたべるわが姿ひとよ見る
なと思ひつつをかし

老いてのちはたらくことを教へられかくて生
きむと心熱く思ふ

竹藪ははや色かはる春の色か青くきいろく遠
い竹やぶ

きさらぎの麥生に向ふ窓よりぞはるけきもの
が眼に映りくる

われひとり時のうごきに遠くゐてまぼろしが
ゑがく忘れたる顔

をんどり

ほのぼのと亡き子を思ひ堀辰雄のあたらしき
本けふは讀みぬる

追分のなぞへの家に君が見る遠山山は空より
青からむ

無花果の葉影うごかぬ日ざかりにわが心ふいに曇りゆきたり

いてふの樹の青き毛蟲が落ちきたるわづらはしさも夏の風物

洗面器バケツも並べ雨もりの部屋に本よむ氣をくさらすな

芝に交る雑草のしげりすさまじくわが部屋のそとは青き七月

守宮^{やもり}は手をもてつかまり王の室^{むろ}にをると書^かにありけり熱き國ならむ

よわりはてすべものうくなりし時涼風ふきてわれを生かしぬ

外苑にクロイバの花しろく咲けりベンチの男
われをじろりと見る

うすぐらき蒼古の空氣にとりまかれ苦しくな
ればわれは野に出づ

をさなごの母が放せるにはとりら草間にしろ
く夕べの散歩す

めざめゐて夜あけの鶏の聲をきくただ一羽鳴
けるさびしきをんどり

白桃

さつそうとパンパンひとり住む家に白桃の花
は眞珠のごとし

初夏の心かろければバスに乗りわがむさし野
を西へ西へ行く

生くること

何ごとのよきことあらむやとわびつつもなほ
好きことを夢みるわれらは

むさし野と信濃と往きつかへりつつ二とせ吾
は青海を見ず

敗戦と革命のなかに月日ゆき樹ぐさのやうに
そだつ子供ら

砂糖ほしくりんごも欲しく粉もほしとわが持
たぬ物をかぞへつつをる

生くること難かしくなりし世の中に紛れ生き
よとわが子言ふならむ

わかき友

竹柏園のわかき友宇野榮三氏を

南方に眠りし人のおもかげをたのしき過去の
或る日につなぐ

野はらの家

雪のこる畑の前方さきの竹やぶも黄きばみ光りて春
のいろなる

ただ暫しと京濱の家にわかれ来て野はらの風
にも霜にも馴れぬ

人よりもすこし多くのいもなど食べさむき野
はらに何時までか住まむ

心凍えうつしみ弱り野の家になほいくたびの
冬を越すべき

ながかりしわが世の日かず限りあれば會はま
くほしも野の明けくれに

遙けきもの

ふるき友の笑ひごゑなど思ひうかべ田舎のく
らし静かなり今日も

きさらぎの麥生に向ふ窓よりぞ遙けきものが
目に映りくる

春日

人にいふごとく物いひ白猫のしろきのだ毛を
かき撫でてゐる

いまのわが所^ち在^は忘れて春日に古き石佛の繪
など見てをり

わらべ三人春日を浴びてならび行く左の端が
一ばん大きい

火をのがれ春閑かななる家むらよ八重の櫻も今
をさかりに

おろかしき母かなけふも春日みつつなほ青年
なる顔おもひるし

うつそみの思ひあまりて祈ること神ならねど
も吾はききたり

美しき遠世となれる月も日もわれに教ふるこ
と多かりし

ひとりゐるの門を出づれば入日あかき檜原の道
を人も來らず

夏ふかく

むさし野よめざましく青しこの國が戦はざり
し好き日のごとく

朝つゆの草徑すぎて家家のかぼちやのみり
見て歩くなり

朝日いまのぼらむとすも霏うすくながるる畑
の茄子のむらさき

青き野の葉のうへ流るる露よりか朝ぞらより
か初秋かぜは

騒音

焼跡のちひさき店をのぞきみて寶石賣らむと
ぞわれは入りたる

すぎし世の古りたる物は捨てもせむ吾みづか
らをわれは負ひつつ

たべものや軒を並べて人らゆくわが身に遠き
街まちのにぎはひ

わかきらが海彼に死ぬ日まぼろしはあやに明
るき銀座を見しや

わざはひの空より降りし日は遠く人ら群がり
ぎんざを歩く

いはけなく若きごんざも街をゆく人みな古し
外國よこくにのひと

142

店さきに刀自はほほるみ手を振りてむかしの
友のわれを呼びをる

騒音のみなぎる辻をよぎりゆく百年前のわが
うすき影

灰いろの雲のきれめの秋ぞらはあをく清らに
われを澄ましむ

信號の笛鳴りひびきすきや橋の人波うごく過
ぎし日のごと

143

ひばりの歌

大伴家持の歌をよみかへす折ありて

むかしびと詠みける春の歌のなかにひばりの
歌をうつくしと思ふ

みかづきのうら若かりし歌びとの最初はじめての歌も
花のにほひす

なき父のいよよ戀しくしらぬひの筑紫の梅の
歌よみかへす

春の苑くれなる深き桃の花の木かげの人は花
よりもにほふ

フランスの詩人うたびとのごときほこり持ち政治する
間に歌つくりせし

紀の女郎をとめ小鹿とよびしわかき子は幾つもの歌
に映されてゐる

射水川あさ漕ぐふねの船うたを館やかたにひとり守かま
がききゐし

家まもる都のひとに贈るべく百ももの眞珠も欲し
とぞ詠みし

み越路のましろの鷹をうたに詠みて鄙あはれのむす
めは見かへりもせず

鳴きとよむ雉きざし子のこゑを聞きながら朝かすむ
山を見てゐたりけり

みちのくに金花くがねさくといはひける聖武の御代
の日本の春

大伴のつよく清^{きよ}けき氏の名にくもりあらずな
と常いのりつつ

夢

遠くまでわが夢はわれを誘ふなり混亂の世に
うつしみを置き

苦難の目みじかくされて日本は大わだつみに
とりのこされぬ

傳説はけふもうつくし青海の八十島越えて來
し神神よ

春の來てあをむ國土に息づけば流浪民さすらひびととわれ
らを思はじ

たま消ゆる水火の底をくぐり來て靜かにわれ
ら息づかむとす

うら深く苦しむものに約されし平和は暗くす
ずしくあらむ

いのちたもち生きながらふる幸運さいはひのわれらの
心柔らかならしめ

衣しろく日に乾されつつ東京もふるさとめき
し閑ひらかなるとき

もろもろの悲しき事もあやまちも過ぎたるも
のは過ぎ去らしめむ

いたち

山茶花のしろき花散る朝庭をわが見ると知ら
ずいたちが通る

風もなく秋日みなぎる芝庭にいたち出で來ぬ
野のにほひすも

うつくしき茶いろのけものすくすくと枯芝庭
を野にむきて行く

鮎など秋日に歩くわが庭は古きむさし野の茅
原なりけむ

輕井澤にありて

大正十四年—昭和二十年

日 中

信濃追分にて

はれやかに杳掛の町の屋根をみるこの川のほとり人なく明るし

しみじみとわれは見るなり朝の日の光さだまらぬ浮洲の夏ぐさ

風あらく大空のにぎり澄みにけり山山に白き
卷雲をのこし

板屋根のふるび静かなる町なかにただ一羽飛
ぶつばめを見にけり

さびしさの大なる現はれの淺間山さやかなり
けふの青空のなかに

影もなく白き路かな信濃なる追分のみちのわ
かれめに來つ

われら三人影もおとさぬ日ち中に立つて清水の
ながれを見てをる

しづかにもまる葉のみどり葉映るなり「これ
は山麓」と同じことを言ふ

土橋を渡る土橋はゆらぐ草土手をおり来てみ
ればのびろし畑は

明るすぎる野はらの空氣まなつ日の荒さをも
ちて迫りくるなり

日傘させどまはりに日あり足もとの細ながれ
を見つつ人の來るを待つ

目の照りの一めんにおもし路のうへの馬糞に
うごく青き蝶のむれ

四五本の樹のかげにある腰掛場ことしも來た
り腰かけてみる

しろじろとうら葉の光る樹樹ありて山すその
風に吹かれたるかな

われわれも牧場のけものらと同じやうに静か
になりて風に吹かれつつ

友だちら別れむとして草なかのひるがほの花
を見つけたるかな

をとこたち煙草のけむりを吹きにけりいつの
代とわかぬ山里のまひるま

六里ヶ原にあそぶ

わがさきに夕だちすぎけむ熔岩のくづれたる
路のいちめんの露

わが上をひとむらの雲流れゆく村雨をはりい
ま青きそら

のぼり來し山のたひらにとんぼ飛ぶ谿にも山
にも黄ろき日のひかり

小瀬溪にこの松山はつづくといふ松の葉光り
どこまでも松の山

山あひの空のあかるき日だまりにわれらの煙
草のけむり尾をひく

赤砂の淺間のやまの山ひだに光るすぢあり陽
にふるへつつ

尾のひかる白きけもののかたちして雲一つと
ほる淺間のおもてに

雨遠くすぎ日の透きとほる草丘は一めんには
そき芒の穂ばかり

草も日もひとつ寂しさのこの野はらに生きた
る人もまじらむとする

青くさの傾斜のむかふ大ぞらに光る山山は荒
浪のごとく

生きものはわれわれのみと思ひるたる野原の
遠くに牛群れて立てり

とほくて顔もみえざる野うしども野のところ
どころに時どき動く

八月の空気のなかに一ところわが心のまはり
暗きかげあり

わがむすめそばなる母を忘れはて野原のなか
にさびしげなるかな

雲を見るわが子の瞳くろぐろとこの野のなかに静かなるかな

野のひろさ吾をかこめり人の世の人なることのいまは悲しも

野の遠くに雲の影うごき一ぼんの樹の立つところも曇りたるかな

碓氷

見晴臺にのぼりて

一ぼんの樹もなき山のたひらなりねぼけたる鴉うへを鳴きゆく

山も山も霞の中なるをながめたりどこを眺めても遠きとほき山

しめり風いちめんの熊笹に音を立つこの山も
今かすみの中ならむ

遠みねのほのかなるいろの山ざくら散りつつ
やある山つちましろに

しろき蛾

つるや旅館、もみぢの部屋にて

白鷺の幅のまへなるしろ躑躅ほのかなるかな
朝の目ざめに

亡き友のやどりし部屋に一夜寝て目さむれば
聞こゆ小鳥のこゑこゑ

あさ暗きねどこに聞けばこの部屋をとりまく
樹樹に雨降りてをり

午前九時庭樹あかるし茶をいれてわが飲む音
をきけばをかしく

湯上がりのわが見る鏡ふかぶかと青ぐらき部
屋の中に澄みたり

せと火ばち湯はたぎるなりわが側にしろき蛾
の來たり疊にとまる

雨

昭和十三年六月、輕井澤愛宕の奥に堀辰雄氏
を訪ふ

風まじり雨降る山に杉皮の家ぬれてゐたり君
はいますや

栗鼠なりしや雨ひかり降る前庭をはしり過ぎ
たる小さきものは

雨つゆの降りかかる木の間くぐり來て君が家
の庭に栗鼠のはしる見たり

そらおほふ木の葉に雨のあたるおと縦の木肌
を流れおちる水

むすめらしくほそき姿のわかづまは黒き毛い
との上衣を着たり

フランスの新聞をこまく裂きて堀辰雄暖爐の
火をもす

大き爐にまる薪の火が燃えおこり全山の樹樹
あめの音を立つ

山すその町

かれ葦はら青葦すでに育ちゐてあめつちの動
き頼まるるなり

山すその町はひそかに灯をかくし屋根屋根く
ろく月も曇りた

七月

七月の青きいのちはすさまじく馬越まごえの原に葦
さやぐなり

葦はらの中の砂地に立ちとまり人がうしろか
ら来るやうにおもふ

わが傘のみ一つ見ゆるかと心づき葦はらのな
かに傘たたみたり

苔庭

輕井澤の町にちかき室生犀星氏の庭にて

洞庭の湖かたどりし苔庭にゆれ映る日を見て
いましけり

初冬

かれ葦と枯木かさかさ音たつる野みちを過ぎ
て友が家に來ぬ

夏庭に影をひろげし大木なり一葉も保たず風
にふかるる

ふと薪と白樺の枝も古板も大きき爐に燃しあた
たまる部屋

182

霜つよく草枯れはつる夜もひるも爐をあかく
燃す野のひとつ家

冬來たる野なかの家に爐をもして熱きあづき
をもてなされつつ

家ゆする山かぜはげし朴の葉も紅葉も捲きて
ふきとばさるる

山おろし木の葉吹きちらす野を越えてまさや
かに濃く淺間がみゆる

こがらしに雲ちぎれ浮く野に來たり見むとお
もはぬ淺間に遇へる

183

秋も冬も

昭和二十四年—二十七年

りんご

竹やぶの遠きうごきをながめつつ野はらの家
はまた秋となる

夢とほく散歩に行けどうつそみはひとりの家
にわが飯を食す

四十路すぎわれ老いたりと思ひしも遙けくふるき物語なる

人は死に吾はながらへ幾世経て今も親しくいともしたしき

わが側に人ゐるならねどゐるやうに一つのりんご卓の上に置く

燈火^{あか}満てる小部屋の椅子におちつきて青白き林檎むき始めたり

あらし過ぎ秋日さしいれば疊なき板敷の部屋も今日晴ばれし

颯風^{あらし}すぎぬ夏のなごりの一りんの百日草を青き壺にさす

すぎゆく日

わが知らぬ人ばかりなる村里に今は安けくう
らぶれてをり

鮎など秋の日和に迷ひくる野にちかき庭を珍
らしがりぬ

こまごまと死ぬ日の事を思ひるしその頃の吾
はいとのびやかに

枯木はら満月黒くあがり來ぬけふ初めての春
がすみ立ち

紅椿の大き枝もち行く子あり三月なりと心あ
わてる